トラウマ概念の社会学的応用とその意義

——文化的トラウマ論の検討から——

兼 子 諭*

社会や社会集団の成員が、自然災害や戦争などの歴史的出来事を、直接経験していないにもかかわらず自らの悲劇として感じ語ることがある。だがその一方で、出来事など起きなかったかのように沈黙を貫く場合もある。これらの現象を記述し説明するのに社会学者も用いるのが「トラウマ」概念である。しかし従来の議論は、トラウマを隠喩として用いるだけで、分析のための独自の視点や方法を展開し損なっている。そこで本稿では、J. Alexander らによる「文化的トラウマ (cultural trauma)」論を検討して、国民国家のような「大規模」社会での集会的な「沈黙」や「覚醒」のダイナミズムを探究する際にトラウマ概念を応用する社会学的意義を示す。

文化的トラウマ論が明らかにするのは、悲劇的な出来事に対する集会的な沈黙や覚醒は、出来事の客観的な性格から説明できるとは限らないということである。文化的トラウマ論に従えば、むしろそれは、その出来事がどのように解釈され物語られるかに依存する。悲劇的な出来事に対する集会的な反応は、それが社会に深刻な苦悩をもたらす傷として語られるのか、それとも、最終的には進歩の機会として語られるのかに左右されるのである。文化的トラウマ論を土台にして本稿は、悲劇的な出来事に対する集会的な覚醒や沈黙は文化的に枠づけられる「社会」現象として説明可能であり、個人の心理や精神には還元することはできないことを主張する。

キーワード：文化的トラウマ、集会的トラウマ、トラウマの社会学的意義

1 はじめに

——集会的トラウマ研究の背景とトラウマ概念の社会学的応用の課題——

社会や社会集団の成員が、自然災害や戦争などの歴史的出来事を、直接経験していないにもかかわらず自らが負う悲劇として感じ語ることがある。だがその一方で、その出来事など起きなかったかのように沈黙を貫く場合もある。これらの「社会」現象を記述し説明するのに一部の社会学者も用いているのが「トラウマ」概念であ

* 法政大学兼任講師 satoshi.kaneko.g5@hosei.ac.jp

る。

ギリシャ語の「傷」を語源とするトラウマは、日本語では「心的外傷」と呼称される心身の症状であり、当然のことながら心理学や精神医学の研究対象とされている。だが、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder, 日本語では「心的外傷後ストレス障害」) がアメリカ精神医学会の『精神障害の診断と統計の手引き 第3版』で診断名として採用された1980年以降、人文・社会科学の記憶論や表象論でもトラウマ研究は展開されている(直野 2010: 652)。そして社会学では、洪水に被災した住民が、地域の物理的な破壊とは区別できる、住民としての共同性や住民間の連帯の喪失を被ったと分析する K. Erikson のように (Erikson 1976: 186-203)、個人ではなく「集合的な」トラウマ現象に考察の焦点を合わせている。

さらに、社会的な記憶形成に関する研究に従事する集合的記憶論は、国民社会のような「大規模な」社会がトラウマを負うという社会現象とその影響について言及する。たとえば、アメリカの国民的トラウマ研究に従事する A. Neal によれば、戦争や政治的要人の暗殺、科学技術上の重大事故、テロ行為による大規模破壊といった出来事は、国民が共有するディスコースを混乱させ、その回復が必須であると指向させるという点で、その存立を困難にするのに十分な損傷を社会に与える (Neal 2005: 5-6)。また集合的記憶論の第一人者である J. Olick は、近年の記憶ブームがトラウマの文化や悔恨を解放することで、国家は今や、過去の非行への贖罪により (その正統性を) 判定されていると述べる (Olick et al. 2011: 3-4)。

集合的記憶論が示唆するように「社会や集合体がトラウマを負う」という現象を社会学が取り上げるのは、負の歴史的出来事による被害やその回復に関する集合的な記憶によって、国民的なアイデンティティの形成、維持、あるいは破綻を説明できるという認識に基づいている。歴史学者の P. Nora を参照していえば、社会が負った過去のトラウマ=傷を捉え直すことは、国民のアイデンティティを再構築することにつながる (Nora 1996=2002)。かくして「社会のトラウマ」は、社会学の重要な研究課題として俎上に載せられることになる。

ただし、ここで避けて通ることができないのが、そもそも個人の心的現象を記述するための概念であるトラウマを、社会現象の記述にあえて用いる社会学的意義は何かという問いである。トラウマ研究としての社会学独自の観点を確立することにどれだけ成功してきたかに対する疑問が残るのである。それは、トラウマが問題とされる際には、S. Freud や P. Janet, J. Lacan といった精神分析や心理学の方法論や認識論が参照される傾向が顕著であることにも典型的に表れている¹⁾。

だが、精神分析や心理学の理論枠組をそのまま転用するだけでは、一国民や一族の規模での沈黙や覚醒といった「集合的 (collective)」反応を、個人の心身的症状を単に「集積された (collected)」ものとして認識することにつながる²⁾。社会学がより有意義にトラウマ概念を応用するためには、個人が被るトラウマ現象のメタファーを用いながらも、個人のそれとは区別できる、集合的なトラウマのメカニズムの解明に取り組まなければならないのである。

そこで注目したいのが、女性論やジェンダー論の研究者である A. Kaplan の議論である。彼女は、国民的で社会的なコードやディスコースがトラウマの衝撃やその想起をどのようにして形成するかが、トラウマ研究では重要になるとしている (Kaplan 2005: 2, 43)。このような彼女の議論に刺激を受けて本稿では、集合的トラウマを形成するコードやディスコースの特質を明晰にすることを念頭におきつつ、現在欧米圏で精力的に展開されている J. Alexander らの「文化的トラウマ (cultural trauma)」論を検討する。それにより、国民社会のような「大規模な」社会の現象にトラウマ概念を応用する社会学的意義を明らかにしたいと考える。

2 文化的トラウマ論の理論的概説 ——集合的トラウマ現象の研究のために——

本節では、文化的トラウマ論の理論的側面を概説することにより、集合的トラウマの特徴をいっそう明らかにしつつ、それに関する分析枠組を検討する。

2.1 集合的トラウマ現象の特徴

まずは、文化的トラウマ論を手がかりにして、集合的トラウマ現象の特徴について考えよう。Alexander は、消し去ることのできない痕跡 (indelible marks) が集団の意識に残り、しかもその記憶が永遠に残り続けるものとして刻み込まれることによって、将来にわたるアイデンティティが変質してしまうような恐ろしい出来事にさらされていると集合体の成員が感じるとき、文化的トラウマは生じると述べる (Alexander 2004a: 1. 強調は引用者)。また P. Sztompka も、単に多くの人々の身の上に同時に生じているトラウマと区別される真の「集合的」トラウマは、人々が共通の苦難に陥っていると覚醒し、他者と自らの苦難の類似を知覚して、それを分かち合うものと定義する際にのみ出現すると述べている (Sztompka 2004: 160)。

このようにみえてみると、集合的トラウマ現象の特徴とは、恐怖や苦痛が容易には解消できないという感覚が集合体のレベルで持続的に共有され、またそれにより、集合的アイデンティティの変質がもたらされるという点にある。この点をふまえて文化的トラウマ論は、集合的トラウマは「代理外傷 (vicarious trauma)」という特徴を帯びるとする。「代理外傷」とは、心理学的には、セラピーの過程でセラピスト自身がトラウマ的な感情や症状を経験するという現象を指すが (McCann and Pearlman 1990)、この点について N. Smelser は、代理外傷が発生するのは、感情を表現するための言語が普遍性をもつがゆえに、感情の意味を一般化することが可能だからであるとしている (Smelser 2004: 39-41)。さらに R. Eyerman は、文化的トラウマ論は、トラウマ的な出来事についてではなく、トラウマ的な効果について語ると述べる。国民的で文化的なトラウマは、必ずしも直接的な経験に由来するというわけではなく、マスメディアに媒介された経験として形成されるというのである (Eyerman 2004: 62. 強調は引用者)。

この点をふまえて Alexander は、心理学のトラウマ研究を、トラウマ的な反応の出現にあたり体験の存在や性格を所与とする「素人のトラウマ論 (lay trauma theory)」と批判し、さらにはトラウマ概念の社会学的応用の先駆者である Erikson や Neal を、出来事それ自体の性格との関連からトラウマ現象を理解する「自然主義的誤謬 (naturalistic fallacy)」に陥っているとやはり批判して、トラウマは社会的に構築されると明言する (Alexander 2004a: 3-4, 8-9, 11). ト라우マは、出来事から「自然に」生じるわけではなく、社会的な構築物であるというのである。また、この点について付言しておけば、このような文化的トラウマ論の「構築主義」的性格は、集合的記憶論の泰斗である M. Halbwachs の、社会的な記憶の形成における現在主義的観点を徹底させたものだとすることができる³⁾。

2.2 集合的トラウマ現象の分析軸——トラウマ的出来事の伝播の主体、場、文化コード

さて、文化的トラウマ論に従えば、ある出来事が社会のトラウマと化すには、直接的にはその出来事を体験していない人々に、出来事に対する記憶や出来事への恐怖や脅威といった感覚が伝播する必要がある。それでは、この伝播の過程はどのようにして構成されるのか。そこで文化的トラウマ論は、この過程を説明するために、「文化の担い手 (cultural carriers)」と「制度的アリーナ (institutional arena)」という2つの概念を提唱する。

Smelser によれば「文化の担い手」とは、出来事を文化的な損傷として社会に申し立てる「主体」である。聖職者、政治家、知識人、ジャーナリスト、道徳的起業家、社会運動の指導者などがそれに該当する (Smelser 2004: 38-9). 次に「制度的アリーナ」とは、ある出来事が社会のトラウマであることを主張する「場」である。Alexander によれば、宗教、芸術、法、学問、マスメディア、官僚制度といったさまざまな社会的行為の領域が「制度的アリーナ」となる (Alexander 2004a: 15-22)。

しかし、ただ出来事が言説や表象になるというだけでは社会のトラウマと化すとはいえない。Alexander に従えば、そこで重要になるのは、その出来事が悪として言説化され表象されることである。ホロコーストの文化的トラウマ化の議論で Alexander は、悪とは恣意的な構築物であり、文化的で社会学的な作用の産物だとみなさざるをえないとする。そして彼は、ある事象が悪として構築されることとその事象が集合的なトラウマと化すことの間接的関係を検証することが、文化的トラウマ論の課題となるとする。また彼は、ある事象が悪とコード化されると、その出来事はどれほどの悪性を有するのか、出来事の責任主体や犠牲者は誰か、トラウマ化した行為のもたらす帰結やその行為による犠牲の回復や予防策となるのは何か、なども問題となると述べる (Alexander 2004b: 202-3)。

ここから文化的トラウマ論は、ある事象を社会の悪だと同定することや、ある事象が悪であると同定された際に顕在化する出来事の責任主体や犠牲者性に関する、

社会的な言説や表象に分析の焦点を合わせる。

さらに Alexander は、このような悪をめぐる構築主義的観点的前提として、トラウマ的な出来事をめぐる言説や表象は、出来事がもたらす被害の回復やその傷跡の消去を楽観的に捉える「進歩の物語 (progressive narrative)」と、被害の回復は極めて困難でありその傷跡も決して消し去ることはできないとする「悲劇の物語 (tragic narrative)」に類型化できるとした上で、出来事やその記憶をめぐる言説が「悲劇の物語」と化すことにより、それらは文化的トラウマとしてより深く社会に刻まれるとする (Alexander 2004b)。

出来事のもたらす被害や犠牲はどのような手段をもってしても償うことはできず、その痕跡は永久に消し去ることができない悲劇であるといった意味や感覚を社会に固着させる物語が形成されることにより、その出来事は社会のトラウマ＝傷として恒久的に刻まれるというのが、文化的トラウマ論に一定程度共有される理論的立場だということができる。

3 集合的なトラウマの沈黙と覚醒 ——文化的トラウマ論の事例研究の考察をもとに——

ここまでの議論から、負の歴史的出来事が払拭できない悲劇として社会的に叙述され、さらにはそれを契機にして集合的アイデンティティが形成・変質するといった社会現象を指す概念として、集合的トラウマを定義できることが確認できた。ゆえに、その出来事が社会にとっての「克服可能な過去」と「拭い難い悲劇」のいずれとして叙述されるかを決定する論理構造を読み解くことが、集合的トラウマ研究のまずもっての課題となる。加えて、社会が歴史的に経験してきた複数の負の歴史的出来事のいずれが「拭い難い悲劇」として物語られるのかをめぐる偏向性の考察も、文化的トラウマ論にとっての重要な課題となる。

さてここからは、このような認識をもとにして、個人が被るトラウマに準えることのできる集合的な沈黙や覚醒といった社会現象についての文化的トラウマ論の事例分析を検討しよう。

3.1 トラウマ的出来事への集合的「沈黙」に関する文化的トラウマ論の事例研究の検討

ところで、歴史学や文学におけるトラウマ研究の先駆者である C. Caruth に従えば、集合的な沈黙はトラウマの潜伏期に相当し、体験の中に忘却が内在する点にこそ、トラウマのもつ歴史的な力は存在する (Caruth 1995=2000: 21; 1996=2005: 26)。加えて、集合的記憶の研究に携わる V. Vinitzky-Seroussi と C. Teeger によれば、社会集団とその過去の関係の理解を深めるにあたっては、集合的な沈黙や忘却の過程は重要な研究対象となる (Vinitzky-Seroussi and Teeger 2010)。そして、文化的トラウマ論の主な問題意識の1つとして挙げられるのが、ある時期には社会の

トラウマとして語られる出来事について別の時期には沈黙が貫かれる要因や、社会の存立を脅かす出来事であるといった言説や表象が形成されない要因を解明することである。

この点をふまえて文化的トラウマ論の事例分析をみてみよう。その分析に従えば、集合的な沈黙や忘却をもたらす第1の要因として挙げられるのが、政府の権力や物理的暴力である。この点についての文化的トラウマ論の事例研究としては、D. Bartmanski と Eyerman が手がけた、旧ソビエト連邦領スモレンスクでのソビエト内務人民委員部によるポーランド捕虜の銃殺事件、通称「カティンの森事件」についての分析が挙げられる。彼らによれば、実行者はナチス・ドイツだとするソ連政府が構築した物語に則って、虐殺の知識は消散し、未完了で、脆弱なものとなった。さらに、この物語はポーランドによっても継承され、検閲、調査局の設置、秘密警察の捜査により、民間の記憶の伝承に対する検挙・弾圧などが行われたのである (Bartmanski and Eyerman 2011: 246-8, 251-3)。

だが、文化的トラウマ論に従えば、ある出来事に対して集合的に沈黙が守られるか否かを左右するのは、政府の権力や物理的暴力といった言説や表象の「外部の」力学だけでない。その出来事を悲劇と進歩のいずれとして意味づけるのかという言説や表象に「内在する」力学も、集合的な沈黙が維持される上での重要な要因となる。この点について文化的トラウマ論は、集合的トラウマを引き起こしかねない複数の負の出来事を歴史的に経験した社会である出来事が集合的トラウマとして覚醒される場合に、それとは別の出来事は、①後の社会の進歩のための糧であったとして積極的に物語られる、②出来事をもたらす被害や犠牲が矮小化されたり、その意味が反転して「ロマンス」として物語られる、などといった言説上の傾向が出現することを明らかにしている。

はじめに①についてみてみよう。第二次世界大戦下の1943年に実行された連合国による急降下爆撃に関する旧西ドイツでの集合的想起について研究する V. Heins と A. Langenohl は、この爆撃に対する1970年代の言説分析を行い、この時期においてこの爆撃は、犠牲の当事者世代や後続世代のいずれにとっても文化的トラウマにはならなかったとしている。特に彼らは、出来事を語り継ぐ後続世代にとってこの爆撃が文化的トラウマにならなかった理由の1つとして、戦後ドイツのトラウマであるホロコーストの言説と接合されることによって、当初は空爆の犠牲性を謳っていた戦後ドイツ社会で爆撃の解釈に「二重の革新」が生じたからだとする。この「二重の革新」とは、①ナチス・ドイツや Hitler からドイツを解放する手段として爆撃が捉え直される、②ホロコーストへの共犯関係からドイツ市民を解放する手段としてやはり爆撃が捉え直される、といったものである。終戦やそれによる市民の解放に寄与するものとして再解釈されることにより、爆撃による犠牲は、戦後ドイツ社会の文化的トラウマとしては構築されなかったというのである (Heins and Langenohl 2011: 8-11)。

次に②についてみてみよう。中国の歴史認識問題を取り上げた R. Gao によれば、

毛沢東時代の中国は、日中戦争における日本軍の侵攻による犠牲を私的で個人的な問題であるとし、国家規模での公共圏においては集合的な沈黙を維持した。その理由として Gao は、毛沢東時代の中国では、階級闘争こそが国民史であり、地主などによる搾取こそが文化的トラウマであるという国民的物語が成立していたからだとする。また Gao は、対日戦勝 20 周年であった 1965 年の出版目録を概観し、さらに同年の『人民日報』の社説を分析することによって、毛沢東時代の対日戦争についての語りに次の 3 つの特徴を見出す。それは、①目につきやすい敵は日本軍だが人民の真の敵は搾取階級であり国民党であったという、敵の類型に関する「記号的ヒエラルキー」、②日本軍には被搾取階級出身の兵士も多く、それらは敵であるというよりも中国が救済すべき聖なる対象であるという、日本軍に対する「象徴的曖昧さ」、③日本軍はそもそも手強い敵ではなかったという対日戦争に対する「ロマンス的表象」、である。これらの点から Gao は、毛沢東時代の中国は、対日戦に対して「文化的記憶喪失 (cultural amnesia)」(Gao 2011: 53-6, 65-72) ともいえる状態にあったとしている⁴⁾。

複数の負の歴史的出来事を経験した社会において、そのいずれかが「悲劇の物語」として物語化されることによりその意味が了解される場合、「悲劇の物語」として語られなかった負の出来事は、その被害や犠牲が客観的で統計的な次元ではないかに甚大であるとしても、「進歩の物語」として物語られたり、その意味が反転することで「ロマンス」として物語られたりすることになり、結果として、被害や犠牲に対する沈黙を余儀なくされることが生じうる。ここにわれわれは、集合的なトラウマへの沈黙をめぐる文化的な力学やその作用を看取することができる。

3.2 トラウマ的出来事の「覚醒」に関する文化的トラウマ論の事例研究の検討

3.2.1 ドラマを通じた集合的トラウマの「覚醒」

次に、ある出来事が集合的なトラウマとして覚醒されるということに関する文化的トラウマ論の事例研究を検討しよう。繰り返せば、文化的トラウマ論に従えば、ある出来事が社会のトラウマとなるということは、その経験が「悲劇の物語」として構築されるかどうかにかかっている。それでは、ある出来事が社会にとって払拭できない悲劇として言説化され人口に膾炙するといった事態はいかにして生じるといえるのだろうか。

この点についての文化的トラウマ論の事例分析をみとみると、集合的トラウマの覚醒の要因としてまず挙げられるのは、その社会や社会集団が見込んでいた進歩や発展が成就しなかったというものである。この点について、アフリカン・アメリカ人の奴隷制の記憶をめぐる文化的トラウマ化を検証する中で Eyerman は、奴隷制がアフリカン・アメリカ人にとっての文化的トラウマへと転換する契機となったのは、奴隷制という歴史的出来事そのものではなく、解放後の社会的地位の再建の挫折であったと分析している (Eyerman 2004: 80-2)。ここから、沈黙と同様に、経

済的資力や社会的地位といった言説や表象の「外部の」力学が、集合的なトラウマの覚醒の要因として位置づけられることになる。

だが文化的トラウマ論によれば、集合的なトラウマの覚醒は、言説や表象の「外部」要因によってのみもたらされるわけではない。言説や表象に「内在する」力学もまた、沈黙と同様に、集合的トラウマの覚醒においては重要な役割を果たす。この点を明らかにした研究として、ここでは、アメリカ社会におけるホロコーストの集合的トラウマとしての覚醒現象に関する Alexander の分析を検討しよう。

Alexander によれば、第二次世界大戦下やその直後のアメリカのマスメディアでは、ナチス・ドイツを「究極の悪」だとする報道が支配的であり、ドイツとの戦争は、世界から悪を駆逐し、自国を善なるものと確定するためになされるという「進歩の物語」が喧伝されていた。そして、この物語が普及する中でホロコーストの犠牲者性は、アウシュビッツなどのユダヤ人強制収容所の存在が発覚した後ですら、ナチスが犯したさまざまな歴史的犯罪の中の1つにすぎず、ナチスを打倒することにより克服することが可能とされた (Alexander 2004b: 209-11)。

だが、その後ホロコーストは、映画や著書、テレビドラマを通じて、当事者社会であるとはいえないアメリカ社会にとっての集合的トラウマと化す。中でも Alexander は、1952年に英訳版が出版された『アンネの日記』や、1978年にNBCが放送したテレビドラマの『ホロコースト』の重要性を指摘する。Alexander によれば、これらのドラマは、1人の少女や家族、そしてそれらの人間関係を描出することにより、ホロコーストによる犠牲者性を「人格化 (personalizing)」する。たとえば『アンネの日記』は、ホロコーストや戦争といった Anne の外に生じる出来事ではなく、Anne 個人の精神的苦悩や強制収容所での彼女を取り巻く人間関係にその関心を絞ることを通して、ホロコーストの犠牲者性に対するオーディエンスの心理的な同一化を促したのである (Alexander 2004b: 232-4)。

アメリカ社会にとってホロコーストは、縁遠い世界史的出来事としてではなく、個人の精神や人間関係の苦悩として描き出されることを通して、オーディエンスとしてのアメリカ市民がその犠牲者に自らを同一視できる悲劇として構築されていったというのが、Alexander の分析となる。

3.2.2 集合的トラウマの覚醒のジレンマ——出来事の唯一性の消失

ところで、Alexander はさらに、「悲劇の物語」としてのホロコーストは、あらゆる社会的な悪への感受性を鋭敏にするとしている。そこで彼は、ホロコーストは、一個の歴史的出来事であることを超越して、さまざまな出来事の意味を橋渡しすることで多種多様な社会現象を解釈可能とする隠喩、すなわち「橋梁隠喩 (bridging metaphor)」としての役割を担うようになったとする (Alexander 2004b: 228-9, 243)⁵⁾。

だが彼によれば、これによりホロコーストは「唯一性のジレンマ (the dilemma of uniqueness)」に直面する。人類史上類をみない悲劇であるが故にホロコーストは、さまざまな出来事を評価・記述するための規範的基準としての機能を果たすこ

とになった。だがこれによりホロコーストのトラウマは、さまざまな悪のもとらすトラウマとの比較対象ともなることで、その唯一性を喪失するというのである。彼によればこのジレンマは、ホロコーストと他の出来事との類比をめぐる社会的衝突や、他の出来事との比較考量によって促されるホロコーストの相対化などを生じさせる (Alexander 2004b: 251-2)。

特に、1つめの社会的衝突は、ホロコーストが唯一無二の負の歴史的出来事であることを声高に叫ぶ、生存者からの異議申し立てを契機にして具体化する。そして、この異議の主たる対象の1つが、ホロコーストをめぐるメディア表象である。その一例として Alexander は、ホロコーストの生還者で、1986年にはノーベル平和賞を受賞するなど国際的にも著名なユダヤ作家である E. Wiesel による、NBC のテレビドラマ『ホロコースト』への酷評を挙げる。そこで Wiesel は、「このドラマは、存在論的な出来事をソープ・オペラに一変させた」のであり「このドラマは全く見せかけのものである」といった不満を表明し、「ホロコーストは歴史を超越」するために「それは説明することも視覚化することもできない」と主張した (Alexander 2004b: 229)。Wiesel の主張に表れるように、負の歴史的出来事のトラウマ化の過程では、出来事の唯一性の承認や維持、あるいはその相対化をめぐる社会的な対立や緊張が惹起される。負の歴史的出来事に関する社会的な記憶の継承や規範化に伴う社会的な難局についても、文化的トラウマ論は、それ独自の視点を提供するのである。

4 結論——文化的トラウマ論の検討からみえてくる トラウマ概念の社会学的応用の意義

本節では、Alexander らの事例分析の再考をもとに、本稿の結論をまとめることにしよう。

はじめに、負の歴史的出来事に対する集合的な「沈黙」について文化的トラウマ論は、政府の権力や物理的暴力の動員により沈黙が維持されるといった言説の「外部の」力学を析出しながらも、より重大なトラウマを社会は被っているといった共通了解の下では、その被害の解消を楽観視する「進歩」あるいは「ロマンス」としてその意味が構築されることによって「悲劇の物語」として社会的に叙述されることが抑制されるといった、文化現象に「内在する」力学の作用を明らかにしている。

次に、負の歴史的出来事に対する集合的な「覚醒」について文化的トラウマ論は、社会や社会集団が見込んでいた社会的進歩がなされないことが引き金となって出来事に関する語りが「悲劇の物語」へと転換するといった、やはり言説の「外部の」力学を析出しながらも、それがドラマ（またその中でのパフォーマンス）という文化的な表現をとり、しかもそれが「人格的」に描かれることによりその登場人物に自己を同一化させることを通して、それを視聴するオーディエンスが主要な構成員である社会もまたその出来事をそれ自身のトラウマとして覚醒するに至るといった、

やはり文化現象に「内在する」力学的作用を明らかにしている。

それでは、これらの文化的トラウマ論の知見は、トラウマ概念の社会学的応用にどのような貢献をもたらすのか。1節でふれた集合的記憶論におけるトラウマ概念への言及との異同について整理することで、この点を明らかにしてみよう。

集合的記憶論は、負の歴史的出来事のもたらした被害やその回復に関する集合的記憶とアイデンティティとの関係を記述し考察する上でのキー概念としてトラウマ概念を用いる。この点で文化的トラウマ論と集合的記憶論は、負の歴史的出来事と現代社会の関係について共通の問題関心を有する。しかし集合的記憶論によるトラウマ概念の応用は、トラウマ現象の要ともいえるべき沈黙や覚醒が集合的な次元でどのようにして生じるのかについて、独自の方法をもってそれらのメカニズムを解明するものとはなっていない。

これに対して文化的トラウマ論は、悲劇的な出来事に対する集合的な沈黙や覚醒は、出来事の客観的な性格から説明できるとは限らないことを明らかにしている。文化的トラウマ論に従えば、むしろそれらは、その出来事がどのように解釈され物語られるかに依存する。悲劇的な出来事に対する集合的な反応は、それが社会に深刻な苦悩をもたらす傷として物語られるのか、それとも、最終的には進歩の機会として物語られるのかに左右されるのである。文化的トラウマ論を土台にして本稿は、悲劇的な出来事に対する集合的な覚醒や沈黙は文化的に枠づけられる「社会」現象として説明可能であり、個人の心理や精神には還元できないと主張する。

さて最後に、文化的トラウマ論に突き付けられる課題と、それに対する文化的トラウマ論からの応答の可能性について検討して本稿の議論を終える。本稿でも述べてきたように文化的トラウマ論は、集合的トラウマ現象の社会構築的な性格を力説する。これに対して H. Joas は、Alexander らの *Cultural Trauma and Collective Identity* の書評論文の中で、Alexander の論文を取り上げて、文化的トラウマ論におけるトラウマ概念の規定を次のように厳しく批判する。

Joas によれば、トラウマは構築物以外の何物でもないが、にもかかわらずトラウマ研究においては、トラウマを引き起こす経験が、構築の過程になじまない資質を有しているかが問われなければならない。トラウマ的経験の（言語化への）非同化的な性格（the non-assimilability）が文化的解釈のダイナミズムから独立する客観的な事実性を有するかどうか、トラウマ研究では論じられなければならないのである。にもかかわらず Alexander のトラウマ論は、このような問題意識をまったく欠くのである（Joas 2005: 368）。

たしかに、トラウマ体験の記憶の極端な保持と忘却の原因として Freud 以降言及されてきたのは、それが「言語化できないものとして残り続ける」という点であった（Freud 1972=2006 ; Berger 1999）。構築主義の考察の中で北田暁大が提起した「存在の金切り声」（北田 2001: 267）を想起させる「言語化に抵抗する実在」が、集合的トラウマ現象に必須となる言語化の過程にはくすぶり続けるといえよう。逆にいえば、出来事を言語化できるということは、その本質である混

沌からはすでに距離をとる段階にあるともいえる (Frank 1995=2002: 140-1). この点に鑑みると、構築主義的な性格を強く有する文化的トラウマ論の妥当性は根底から覆されることになる。

それでは文化的トラウマ論は、負の出来事の「存在の金切り声」をまったく問題としえないのか。私はそうとはいいい切れないと考える。その反対に文化的トラウマ論は、ホロコーストをめぐる「唯一性のジレンマ」論が示唆するように、経験が言語化されることを通してその意味が共有可能なものとされるさなかにおいて、その経験が「ほかに比べようもなく筆舌に尽くしがたいものである」ことが執拗に叫ばれるという形をとって原体験の「存在の金切り声」が波及するといった「社会」現象に適切に着目し、独自の文化論的な枠組をもって記述しつつ説明を施している。そこで私は、負の歴史的出来事をめぐる「存在の金切り声」が社会的なコミュニケーションの中で顕在化し、さらにそれが社会問題化するメカニズムについては、文化的トラウマ論は一定の分析や検証が可能であると考ええる。

また、言語化という行為自体がトラウマの発症や深刻化を招くという事態も見逃せない。この点がうかがえるのが、トラウマの症状の原因としての幼児期の性的虐待の記憶の正確性をめぐる「偽りの記憶 (false memory)」論争である。アメリカの PTSD 研究の第一人者である B. Van der Kolk によれば、この論争は、それが親の親権や刑事責任に大きく関わってくるために、(Alexander のいう「制度的アリーナ」としての) 裁判所への訴えとして持ち込まれる。そして、この法的な言語化の過程は、トラウマの発症者や被害者に激しい苦痛をもたらし、さらには、その訴えが正当なものであろうと偽りのものであろうと、告発された側に破滅的な影響をもたらすために感情的な問題を生み出す (Van der Kolk et al. eds. 1996=2001: 51-4)。ここで重要なのは、実際に性的虐待を受けたかどうかにかかわらず、性的虐待をめぐるディスコース自体がトラウマを喚起するという点である。

この点について I. Srubar に従うと、トラウマには2つのレベルがある。1つは、何らかの体験に起因するトラウマであり、もう1つは、(負の歴史的出来事をめぐる) 権力のディスコースの枠組の中で勃発する社会的闘争の結果生じるトラウマである。つまりトラウマは、言語化により生み出される闘争や迫害の所産であるともいえる (Srubar 2016: 27)。そこで文化的トラウマ論は、言説の「内的」要素としての物語性とその社会的効果の関係を明らかにすることを通して、負の歴史的出来事をめぐる解釈や記憶形成に関わる社会的闘争の渦中で惹起される集合的トラウマに関しても、その文化論的視座から説明を与えるといえるのである⁶⁾。

【謝辞】 本論文の査読にご尽力頂き、さらには、適切かつ丁寧なコメントを賜った、匿名の査読者の先生方に、心より御礼を申し上げます。

【注】

- 1) 日本の社会学界でこの点が端的にうかがえるのが、『社会学事典』に所収される「トラウマ

- 記憶」項目記事（直野 2010）や『社会学理論応用事典』に所収される「トラウマ」項目記事（樫村 2017）である。これらの項目記事には、残念ながら、社会学者は一切登場していない。
- 2) この点については、W. Kansteiner による「集積された記憶 (collected memory)」と「集合的記憶 (collective memory)」の区別を参照した (Kansteiner 2002: 186)。
 - 3) Halbwachs における記憶の構築主義的視点と本質主義的視点の関係については、金瑛 (金 2010) が参考になる。
 - 4) Alexander との共同論文でも Gao は、1937 年の南京事件に焦点を絞ってみても、同様の分析が可能だとしている (Alexander and Gao 2012)。
 - 5) Alexander によれば、1960 年代から 70 年代のアメリカでは、アメリカ政治に批判的なマイノリティにより、ホロコーストの犠牲者であるユダヤ人とアメリカ白人社会の発展の犠牲者としての自らを類比するといった事例が数多く認められる。さらに、橋梁隠喩としてのホロコーストの応用の興味深い例として Alexander は、1980 年代の反核運動を挙げる。この運動に従事する政治家や運動家は、核兵器の試験や発展を「核のホロコースト」と呼称することによって、その影響力を拡大したのである (Alexander 2004b: 245-6)。
 - 6) なお、1961 年に開廷された、元ナチス政権下のドイツの親衛隊将校で、アウシュヴィッツ強制収容所へのユダヤ人の移送に関与していた A. Eichmann の裁判とそれに対する H. Arendt の論評が、アメリカ市民のホロコースト加害者への同一化を促したとする Alexander の議論 (Alexander 2004b: 235)、60 年代の学生運動や、当時の西ドイツ首相 W. Brandt が 1970 年にポーランドを訪問した際に行ったワルシャワゲトのユダヤ人犠牲者追悼碑での謝罪が、西ドイツ市民のホロコーストの加害者性への国民的な覚醒を促したとする B. Giesen の議論 (Giesen 2004: 131-3) のように、文化的トラウマ論は、犠牲者性だけでなく加害者性をも集合的なトラウマと化すとし、その分析に取り組んでいる。

この点について Kansteiner は、Caruth のホロコースト論などを念頭においてではあるものの、被害者と加害者、そして暴力的な行為の傍観者の道徳的な区別を文化的トラウマ論は無視していると批判する (Kansteiner 2004: 194)。その論文名にあるように、そのようなトラウマ論は「カテゴリー錯誤」に陥っているというのである。

Kansteiner がいうまでもなく、犠牲者性のみならず加害者性がトラウマ化するというのは奇異なことのように感じられる。だが、加害行為と PTSD の関係については、1990 年代から PTSD 理論でも研究が進んでいる。精神科医の笠原敏雄によれば、加害行為が PTSD を発症させる要点としては、①被害者が子供である殺人である、②行為に対する後悔や自責の念に加害者自身がかられている、などが挙げられる (笠原 2011)。

また現実には、第二次世界大戦後のドイツや日本のように、加害者性やその記憶を後続世代が忘却すべきではないものとして継承したり、この継承をめぐる社会的な摩擦や葛藤が生じたりすることは、先進社会の重大な社会問題になっている。このような現在の事情を鑑みれば、加害者性がトラウマ化するというのはカテゴリー錯誤であるとはいいい切れず、トラウマ概念の応用の可能性の拡大に貢献するとすらいえよう。

【文献】

- Alexander, Jeffrey. 2004a, "Toward a Theory of Cultural Trauma," Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 1-30.
- , 2004b, "On the Social Construction of Moral Universals: The "Holocaust" form War

- Crime to Trauma Drama,” Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 196-263.
- Alexander, Jeffrey and Rui Gao, 2012, “Mass Murder and Trauma: Nanjing and Silence of Maosim,” Jeffrey Alexander, 2012, *Trauma: A Social Theory*, Cambridge: Polity Press, 118-35
- Bartmanski, Dominik and Ron Eyerman, 2011, “The Worst Was the Silence: The Unfinished Drama of the Katyn Massacre,” Ron Eyerman, Jeffrey Alexander and Elizabeth Breese eds., *Narrating Trauma: On the Impact of Collective Suffering*, Boulder: Paradigm, 237-66.
- Berger, James, 1999, *After the End: Representations of Post-Apocalypse*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Caruth, Cathy, 1995, *Trauma: Explorations in Memory*, Baltimore: Johns Hopkins University Press. (下河辺美知子監訳, 2000, 『トラウマへの探究——証言の不可能性と可能性』作品社。)
- , 1996, *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*, Baltimore: Johns Hopkins University Press. (下河辺美知子訳, 2005, 『トラウマ・歴史・物語——持ち主なき出来事』みすず書房。)
- Erikson, Kai, 1976, *Everything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*, New York: Simon and Schuster.
- Eyerman, Ron, 2004, “Cultural Trauma: Slavery and the Formation of African American Identity,” Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 60-111.
- Frank, Arthur, 1995, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, Chicago: University of Chicago Press. (鈴木智之訳, 2002, 『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版。)
- Freud, Sigmund, 1972, *Gesammelte Werke Volume 17*, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag. (須藤訓任・藤野寛訳, 2006, 『フロイト全集 17』岩波書店。)
- Gao, Rui, 2011, “Revolutionary Trauma and Representation of the War: The Case of China in Mao’ Era,” Ron Eyerman, Jeffrey Alexander and Elizabeth Breese eds., *Narrating Trauma: On the Impact of Collective Suffering*, Boulder: Paradigm, 27-51.
- Giesen, Bernhard, 2004, “The Trauma of Perpetrators: The Holocaust as the Traumatic Reference of German National Identity,” Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil J. Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 112-54.
- Heins, Volker and Andreas Langenohl, 2011, “A Fire That Doesn’t Burn? The Allied Bombing of Germany and the Cultural Politics of Trauma,” Ron Eyerman, Jeffrey Alexander and Elizabeth Breese eds., *Narrating Trauma: On the Impact of Collective Suffering*, Boulder: Paradigm, 3-26.
- Joas, Hans, 2005, “Cultural Trauma? On the Most Recent Turn in Jeffrey Alexander’s Cultural Sociology,” *European Journal of Social Theory*, 8(3): 365-74.
- Kansteiner, Wulf, 2002, “Finding Meaning in Memory: A Methodological Critique of Collective Memory Studies,” *History and Theory*, 41: 179-97.
- , 2004, “Genealogy of a Category Mistake: A Critical Intellectual History of the Cultural Trauma Metaphor,” *Rethinking History*, 8(2): 193-221.
- Kaplan, Ann, 2005, *Trauma Culture: The Politics of Terror and Loss in Media and Literature*, New

Brunswick: Rutgers University Press.

笠原敏雄, 2011, 『加害者と被害者の“トラウマ”——PTSD 理論は正しいか』国書刊行会.

櫻村愛子, 2017, 「トラウマ」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 224-5.

金瑛, 2010, 「アルヴァックスの集合的記憶論における過去の実在性」『ソシオロギス』34: 25-42.

北田暁大, 2001, 「〈構築されざるもの〉の権利をめぐる」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 255-73.

McCann, Lisa and Laurie Pearlman, 1990, *Psychological Trauma and the Adult Survivor: Theory, Therapy, and Transformation*, New York: Brunner/Mazel.

直野章子, 2010, 「トラウマ記憶」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善, 652-3.

Neal, Arthur, 2005, *National Trauma and Collective Memory: Extraordinary Events in the American Experience*, 2nd ed., New York: M.E.Sharpe.

Nora, Pierre, 1996, *Realms of Memory: Rethinking the French Past*, Arthur Goldhammer, trans., New York: Columbia University Press. (谷川稔監訳, 2002, 『記憶の場 1 対立』岩波書店.)

Olick, Jeffrey, Vered Vinizky-Seroussi and Daniel Levy, 2011, "Introduction," Jeffrey. Olick, Vered Vinizky-Seroussi and Daniel Levy eds., *The Collective Memory Reader*, New York: Oxford University Press, 3-62.

Smelser, Neil, 2004, "Psychological Trauma and Cultural Trauma," Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 31-59.

Srubar, Ilja, 2016, "Life and Trauma: Selectivity of Social Memories," Gerd Sebald and Jatin Wagle eds., *Theorizing Social Memories: Concepts and Contexts*, London and New York: Routledge, 17-31.

Sztompka, Piotr, 2004, "The Trauma of Social Change: A Case of Postcommunist Societies," Jeffrey Alexander, Ron Eyerman, Berhardt Giesen, Neil Smelser and Piotr Sztompka, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press, 155-95.

Van der Kolk, Bessel, Alexander C. McFarlane and Lars Weisaeth eds. 1996, *Traumatic Stress: The Effects of Overwhelming Experience on Mind, Body, and Society*, New York: Guilford Press. (西澤哲訳, 2001, 『トラウマティック・ストレス——PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて』誠信書房.)

Vinitzky-Seroussi, Vered and Chana Teeger, 2010, "Unpacking the Unspoken: Silence in Collective Memory and Forgetting," *Social Forces*, 88(3): 1103-22.

(原稿受付 2017.12.9 掲載決定 2019.4.5)

The Sociological Application of “Trauma” and Its Significance: Examining Cultural Trauma Theory

KANEKO, Satoshi

Hosei University

satoshi.kaneko.g5@hosei.ac.jp

In some cases, members of societies and social groups feel and talk about historical events, such as natural disasters and wars, as their tragedies without having had experienced them directly. However, in other cases, they remain silent on these events as if the latter had not happened. To describe and explain these phenomena, some sociologists use the term “trauma.” In their arguments, they use this term metaphorically and fail to develop analytical frameworks and methods. Examining the theory of cultural trauma developed by Jeffrey Alexander and his joint researchers, this paper attempts to show the sociological significance of the concept of “trauma” for exploring the dynamics of collective “awakening” and “silence” in such a large-scale society as a nation-state.

The cultural trauma theory suggests that the collective silence and awakening over a tragic event cannot necessarily be explained by the objective characteristics of the event itself. According to cultural trauma theory, rather it depends on how the event is interpreted and narrated. Thus, the collective response to a tragic event varies depending upon whether the event is narrated as a deeply troubling injury for society or as an opportunity for its progress. Based on the cultural trauma theory, this paper argues that the dynamics of collective silence and awakening can be explained as culturally framed social phenomena, which cannot be reduced to the minds or spirits of individuals.

Key words: cultural trauma, collective trauma, the sociological significance of trauma

(Received Dec. 9, 2017 / Accepted Apr. 5, 2019)